

子供は古典の美しい響きやリズム、格調高さが大好き

私は、幼少期に漢字の読みの力をつけ、本を読む楽しさに目覚めることは、一生の財産になると折にふれ、力説しています。ここでもう一つ、読む本の中に、古典を加えることの大切さを声を大にして言いたいと思います。

「古典といわれても、親である私自身、馴染みがありませんし、難しすぎるのではありませんか。かえって、読書の楽しさを損ねるようで心配です」と危惧されるかもしれません。それは、古典に対するゆえなき差別であり、誤解というものです。

古典は難しい言葉が多いからというので遠ざけるのは間違いで、幼少期の子供はむしろ難しいものを喜んで求めています。それに触れるのが楽しいのです。親が古典に馴染みがないのは、文部科学省にも責任あることですが、その“悲劇”を子供に再び味あわせることは避けるべきです。

もちろん、古典といっても、読み聞かせや、朗唱(声をあげて読むこと)により、古典ならではの言葉の美しい響きとリズムを楽しむことを

主眼とします。内容を解釈し理解するのは、中学なり、高校なり、その後なり、その勉強にふさわしい年齢を待てばいいことです。その場合も、幼少期に古典に親しんでいれば、違和感を感じることなく意欲的に取り組むことができるはずです。

作家の林望氏が、東京芸術大学で国語の教員として『平家物語』を朗読する授業をしていたとき、何人もの作曲家たちが、「音楽的で非常に面白い」と言って聴きにきていたそうで、「日本語のリズムというものは実に美しいものだ」と言って感心しきりだったと、鼎談の中で語っていました。そして、「私はそういうことをもっと感性の豊かな子供のときに刷り込んでおく必要があると思っています」と自説を紹介していましたが、私も以前からまったく同じ考えを唱えてきているわけです。

ではなぜ、幼少期に、古典の美しい響きやリズムに親しむことが大事なのでしょう。

まず、古典を耳と目で楽しむことによって、言葉の感性が磨かれることが挙げられます。次に、解釈をとまなわなただけに、イメージ力を高めます。さらに、古典の文章は格調高い骨組みが基盤となっていることが多いため、人間の深いところで、構成力や構想力、創造力な

どを育むことになります。

要するに、古典に親しむことは、時代を超えて綿々と生きつづけてきた日本文化に向き合うことであり、日本人としての感性や知性、人間性を磨くことになります。もっといえば、古典に通じることで、日本人としての自覚が生まれ、世界観がはっきりするともいえるのです。

それだけに、かつては、古典の朗唱は教育の要として位置づけられていました。

ご存じのとおり、江戸時代の寺子屋では、読み・書き・算盤^{そろばん}が三本柱で、“読み”の時間にはただひたすら声をあげて読んでいたのです。それがあとで、いつの日か、魂の糧、人生の糧になっていくというわけです。

吉田松陰や橋本左内というような人は、三、四歳のころから古典を読み、十歳ともなれば、すばらしい詩文を作っています。人々は、これを生まれつきの天才という言葉で片付けていますが、彼らは、生まれつき頭がよかったから三、四歳で古典を読めたのではなく、三、四歳という時期に古典を読んだので頭がよくなったのだと思います。

時代が下って、ノーベル物理学賞受賞者の湯川秀樹博士は著書

の中で、「四歳のときから、母方の祖父から、四書(『大学』、『論語』、『孟子』、『中庸』)や『孝経』、『史記列伝』などを素読させられた。中学のころは、『老子』や『莊子』を愛読するようになった。ある日、寝つかれないままに、ふと幼いときに素読した李白の文章が頭に浮かんだ。[それ天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり] これが中間子の発見につながった。この詩が時空と素粒子の相互規定を象徴しているとひらめいたのである……」と書いています。

湯川氏は、「創造力と記憶力、この二つは反対のもののように思えるが、そうではなく、創造性の発現は、相当大量の、そして相当程度まで系統だった記憶を素地として、はじめて可能なのである」と分析もしています。

くり返しますが、幼少期の子供は、古典の美しい響きやリズム、格調を好みます。この時期に、古典を与えるか与えないかは、親の配慮ひとつにかかっていることをしっかり自覚していただきたいと思います。

もし、お母さんやお父さんが、古典はどうも苦手というのなら、この際、子供といっしょに新たな気持ちで、古典を朗唱してはいかがでし

よう。大上段に構えず、日本の美しい言葉の世界を遊ぶぐらいの気持ちで楽しめばいいのです。

最初は比較的取っ付きやすい^{ことわざ} 諺や俳句、和歌ならば『小倉百人一首』、物語なら『竹取物語』などから始めて、『万葉集』や『古今和歌集』、『伊勢物語』や『源氏物語』、また『漢詩』や『論語』といった作品へと進むことをおすすめします。

具体的な方法としては、初歩の段階にぴったりの諺や俳句、百人一首などは、画用紙などに漢字かな交じりで書き移したものを用意し、まず親が読み、次に子供が読みあげるようにします。また、たとえば一週間で七枚が読めるようになったら、その七枚を使って、かるた遊びなどをするのも一案です。楽しく学ぶ この姿勢は、古典に対しても心がけたいことです。

画用紙に書くのが面倒という向きには、石井式の「漢字かるた」シリーズの中から、『諺かるた』『俳句漢字かるた遊び』『小倉百人一首』などを利用するといいでしょう。